

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム 「渋谷ラジオ」

令和6年度番組 「展覧会のあと」

ゲスト5：米田昌功さんをお招きした回のうち、#18のテキストです。

○河原 「展覧会のあと」の大きなテーマは「あと」です。音で聞くと「あと」、いろんなものがイメージされるかとは思いますが、いろいろ考えまして、まず1つ目は「痕跡」。「trace」という英語になりますけど、そういう痕跡としてのあと。

もう1つが「印」。これは「mark」ですね。何か自分の印であったり、何かをしたことを示すようなもの。

そして、「展覧会のあと」といったときに、恐らく一番イメージするのは「later」のあと。「その後（あと）」「その後（ご）」どうなったかみたいな、そういったことをイメージするかと思います。

あるいは「背後」。「behind」という意味の背後。展覧会の背後にあったもの、背景であったり、どういったことを経緯としてやっていたかみたいな、そういったことをイメージして、「展覧会のあと」というトークのテーマにしているんですけど、展覧会を基軸として、その前、その後、どういうふうな広がりがあったかみたいなことをちょっと伺えたらなということで、テーマとしております。

まずは、先ほどもいろいろ米田さんの自己紹介のところで伺ってはいるんですけども、米田さんとアール・ブリュットとの出会いというか、今言った「behind」の部分になるかとは思いますが、そういう出会いからこの活動になっていく経緯というか、そういったところをちょっと伺えたらなと思います。

○米田 今の活動に至るところまでにいろんな要素が重なって、何かこの活動をやらなきゃならないようなところに導かれてきたような感じがありましてですね。(笑)

○河原 なるほど。導かれた。

○米田 もともと美術大学では日本画を専攻していて、そういう世界で作家活動が将来的にもできたらというようなところでやっていたんですけど、やっぱりいろいろ学生、美大生なりの悩みとか、当時の壁だったりとか、いろんなことがありまして、東京へアルバイトで金が集まったらいろんなところの展覧会を見に行くというようなことをやっていたんですけど、そこで私が当時一番影響を受けていた展覧会というのは「人人展」という展

覧会だったんですね。これは後で知ったんですけど、いわゆる日本でアール・ブリュットが盛り上がる1つのきっかけとなった「まひるのほし」とか映画だったりとか、滋賀県のほうでそういう人たちを見いだしていく田島征三さんという絵本作家さんがいらっしゃるんですけど、その方が人人展の創設、創立期のメンバーなんですよ。

○河原 あっ、そうなんですよ。

○米田 そういう人人展というところにいる作品とかが好きで、よく見に行っていたんですけど、あるとき、東京のいろんな展覧会とか自分の好きな展覧会とかを見て回っているときに、必ず私の前か後ろに歩いているご婦人がいるんですよ。

○河原 えっ、そんなことあるんですか。(笑)

○米田 そうそう。(笑) 5つ、6つぐらい回っていたんですけどね。

○河原 はあ、すごい。

○米田 何か青い大きなつばの帽子、ひらひらした服を着て、結構目立つ方で。なので、何か自分と嗜好が似ているなと思っていたら、ちょうど、多分東京都美術館、本当に人人展を見ているときだったと思うんですけど、その方に声をかけられて、「どうして私について回るのよ」って言われまして。(笑)

○河原 (笑) 気づいていらっしゃる。

○米田 そうそうそう。向こうも気づいていたらしくて、必ずあの男がいるって。(笑)

○河原 (笑)

○米田 そうすると、いろいろ話をしていたら、その人人展というのをつくった中村正義さんにずっとお世話になって、作家活動している方だったんですけどね。

○河原 作家の1人だったんですか。

○米田 作家だったんですよ。しかも、ぱっと見て分かるんですけど、やっぱりそれもあって目立ったところもあったんですけど、小児麻痺を持っていたらして、小児麻痺として生まれて、体を引きずりながら歩いている方だったんですね。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 それで、作家だったのかと思っていろいろ話を聞いていたら、自分の当時一番影響を受けていた中村正義さんという人に関わっている人ということで、中村正義さんの話を聞きたい一心で、その方の家に行って話を聞いたりとかいろんなことを始めて、その人の作品を見たときに結構衝撃だったんですよ。あんまり、その人も日本画の材料を使って絵を描く方だったんだけど、見たことがない、フォーヴィスムに近い表現でした

けれども、見たことがない絵だったんですよ。

○河原 ふーん。

○米田 普通に物を捉えて描いているだけなんだけど、何か見たことがなかった。(笑)

○河原 (笑) なるほど。

○米田 ちょっと表現しづらいんですけど、「なんだ、これは」って感じで。それを見たときに、いわゆるテクニックとかではなく、評価できるとか、あるいは感動につながっていく作品というのは本当に生であるんだというのは実感できたというか。その方は、まあその方の話になってあれなんですけど、結局、中学生のときに中村正義と出会って、その後、毎月東京、神奈川に行って絵を見てもらおうというようなことをずっと続けて、作家として生活しているんですよ、ちゃんと。いわゆる福祉事業所みたいなどころには一切行ったことがなくて、友達とかいろんな方に支援してもらいながら、作家としてちゃんと独立して活動しているという人だったんですよ。

その方がきっかけで、当時既にアウトサイダー・アートとかそういうものも見られるようになっていたんで、その方の作品というのもすごく、実際に心が揺れましたし、こういう人たちの作品の秘密って何だろうというのは、当時から考えていたんですよ。だから、支援学校に行っても全然、むしろもううれしいぐらいで支援学校に行っていたんで。その後、教員になったときとかは。

○河原 この作品の魅力は何だという関心が強かった。

○米田 うん。だから、その当時にやっぱりアール・ブリュットという言葉にも触れて、いろいろ考えていたんだけど、そのときに面白い話を聞いて、中村正義という人が、その作家さんを育てるときに、結局何の助言もしていないんですよ、ずっと。毎月通って、ただ絵を見せていただけって言うんですよ。

○河原 ふーん。

○米田 それで、見ながら、これでよし、これでよしというようなことしか言ってくれなくて、何も、こう描けばもっとうまくなるとか、そういうことを一切言わなかったという。しかもですね、聞くな、見せるな、見るなみたいな、3か条みたいなのを……

○河原 ああ、聞くな、見るな……

○米田 そうそう。(笑) 見ざる言わざるみたいな感じですけど。

○河原 (笑) お猿さんの。

○米田 いわゆる展覧会とかは影響を受けるから、作品を見るなど。人に自分の評価を尋

ねるなど。見せるなですね、それは。聞くなというのは、そういう美術の話とか、そういうような知識というのは必要ないということを、それを守りなさいということと言われて、ずっとそれを守ってきた。まあ、その中村正義さんが亡くなってからは、いろんなつながりとかもできて、そこら辺は緩やかになって、むしろ旺盛に情報を集めたりとかはしている。今まではそういう感じだったけど、いろんな人とつながって。でも、当時は本当に、その人、女性なんです、彼女との関係性だけでずっと絵を見てもらっているだけだった。でも、それが、後でいろんな人から聞いたら、中村正義はその人の、その作家さんの個性というのとかを原石のままで、原石の部分が壊れないように、そのためにずっとそうやってきたと。

○河原 意識的にそういう言葉を伝えていたと。

○米田 意識的に、わざとそうしたという。ほかのヨーロッパの美術に影響を受けた作家さんとか、若い作家さんとかを支援するときって、中村正義さんって、その人に金銭的な、経済的な支援とかもして、ヨーロッパへ留学に行かせたりとか、そういうことができる人。

○河原 ああ、そういう。

○米田 でも、その作家さんに対しては。それっていうのは、後でいろんなことを、こういう活動に入って、支援活動とかに入ってやっていると、何かいわゆるアール・ブリュットのことを中村正義は知っていたかどうか分からないけれども、でも、何かそういう、こういう形でアール・ブリュットって育成できるんやみたいな。(笑)

○河原 確かに、教えないけど、教えているような不思議な関係性がありますね。

○米田 そうそう。そういう環境をつくっていったというようなことを、当時70年代ですよ、1970年代。こんなことしている人がいるんだと思って、ちょっとびっくりしましたね。

だから、何かそういうような出会いとか、そういう人たちとのやり取りというのがあったんで、いわゆるアール・ブリュットというものの見方というの、やっぱりちょっと私なりに何かちょっと違う視点があるというか。アール・ブリュットに関してはいろんな見方とか意見があるんだけど、何かあながち自然発生的にその人が独学で始めたということだけでもないんだなというのは。(笑)

○河原 うん。

○米田 そういうのは、もともとそういうのを見ているんで。そうですね。だから、何かアール・ブリュットっていう言葉に対しても、本当に抵抗なく今も使えているというか。

○河原 結構衝撃の出会いというか、出会ってからいろいろ話を聞くことで、その魅力に

より近づいていったような感じですよ。その女性との出会いもそうだし、もともとの関心だったり、自分の創作のこととかもいろいろ絡み合って、タイミングとかもすごくよかったのかもしれない。

○米田 そうですね。だから、やっぱり作品として接するというか、いわゆる福祉的なところでの出会いというのは最初になかったんですよ、アール・ブリュットというものに。だから、後から、福祉の中でこういう活動が始まったとかというのは、後追いで情報が入ってきていて、私のほうでは。だから、そういう面では、タイミング的にはよかったなと思っていて、今。いわゆるアール・ブリュットの作家さんのたたずまいというか、というものの1つのシンプルな例をまず初めに見せてもらえたというか、福祉というものがなかったらこうなるんだろうなという。

○河原 なるほど。何か具体的に、どういうところに米田さんは「何だ、これは」って思うのかなっていうのがもう少し伺えたら。自分が日本画、結構日本画って伝統的な技法があって、模写があったりするイメージなんですけど、そういったしっかりと描いていくところにいらっしゃったというのもあるかもしれないんですけど、何かアール・ブリュットの作品なり、出会った女性の作品なりで、どういうところが一番びっくりマークがあるんだろうという。

○米田 日本画の作家さんなんだけれども、材料にこだわりがあるんだけれども、ない部分もあるんですよ。全然ない部分も。

○河原 おお。

○米田 さっき言ったフォーヴィスムみたいって言ったのは、人物を描くにしても、筆遣いだったりとかが、物すごく勢いのある筆で描いて、その後、どんどん岩絵の具で塗り重ねていくんだけど、その塗り方が、見たことない塗り方だったんですよ。

○河原 通常はどう塗るものなんですか、そもそも岩絵の具っていうのは。

○米田 そもそもは日本画って薄いにかわから始めて、剥落しないように少しずつ塗り重ねていくというようなイメージがあって、どちらかというと線の美しさだったりとか、色と色の際というものを意識して作品を作り上げていくというようなイメージに近いんだけど、何か彼女のって、本当に岩と岩がそのまま地層みたいにして重なっているというか。

○河原 （笑） なるほど。

○米田 何かちょっと見たことがない塗り方だったんですよ、そういうのは。ちょっと

まねできないんですよ、それが。いろんなものをこう、色をぶっかけているような。

○河原 色をぶっかけている。(笑)

○米田 うん。そういう塗り重ね方だったりとかと思えば、画用紙に自分が拾ってきた、アッサンブラージュみたいに関んなものを貼り付けて、墨でそれに色を描いたりとか、そういうものを何か1か月間延々とやっていたりとか。ちょっと倉庫に昔の作品があつて、今どうなっているか分かんないから、ちょっと見てきて、荒れていたら整理してくれないかとかつて言われて、行ったらですね、物置を開けたら天井までびっしりと陶芸作品が詰まっていたりとか。

○河原 えー。

○米田 何ていうんですかね、何か自分がやりたい、作りたいと思ったときの、その執拗なこだわりというのが、私が今まで見てきた作家さんの中にはなかった、それまで。(笑)

○河原 おお、なるほど。

○米田 ちょっとびっくりしましたね。

○河原 何かそのフォーヴィスム的な、アンフォルメル的な表面の荒さとか厚塗りの感じとか、あとアッサンブラージュとも言っていましたけど、いろんなものを組み合わせた画面の構成みたいな、そういうところもまずそもそも魅力的であつたし、その作り方とか、最後の倉庫を開けたときの衝撃みたいなのも含めて、やっぱり魅力だったというか。

○米田 何ていうんですかね、生活のどこを取っても表現があふれ出てくるというか。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 「何だろう、この人は」という感じで、それは面白かったですね。

○河原 なるほど。じゃあ、その方との出会いがあり、そこから支援学校のほうの先生になられて、約25年ぐらい先生をされていて。

○米田 そうですね。

○河原 そういったときの内容というんですかね、授業の内容だったり、何か覚えているエピソードとかつてありますか。

○米田 そうですね……

○河原 多分ありすぎて選べないぐらいの密度だろうなと思うんですけど。(笑)

○米田 (笑) 美術の授業と、さっき言った美術部というのもあつたんで、それをはっきり分けていたんですよ、私。

○河原 そうか、授業と。そうなりますよね。

○米田 美術の授業は、いろんな技法というか描き方ですね。なるべく自分が、自信を持っていない人が圧倒的に多いんで、支援学校の人って、やっぱり楽しいとか、夢中になれるというような創作体験をしてもらおうというのが授業の基本だったんです。

○河原 うんうんうん。

○米田 だから、本当に簡単な題材だったりとか。だけれども、例えば、作った作品を今度はそれを自分で写真に撮って、今度は写真としての作品に昇華していくとか。何か1つのことをやったときに、1個終わって、完成して、飾っておしまいですじゃなくて、それが展開していくようなやり方だったりとか、そういうやり方というのはいつもやっていたようなところがある。

それに対して美術部というのは、いわゆるそこに顧問の先生、いろんな先生が来るんだけど、人の顔を描いたときに、青色に描いていても絶対間違いつて言わないでねというような。(笑)

○河原 (笑) なるほど。

○米田 そうそう。やっぱり周りにいる人の環境、意識づけというのが中心になっていて、とにかく思い切り、全身で取り組めるというような場所にしたいというのが、それは授業でできないので。あと時間制限もないように、例えば、週1回ぐらいの部活動だったんですけど、支援学校なので、でも、夏休みには1週間ぶっ続けで来るような、合宿形式の部活動にして、自分の体よりも大きいような作品を完成させるというようなことをやったとか。1個そういう自分の体よりも大きい作品を描くと、その後、皆さん本当に自由になるんですよ。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 今、ココペリに来ている人たちも、そういう経験をしている人たちなので。

○河原 なるほど。

○米田 大きい作品に、全然負荷を感じないというか。(笑)

○河原 もう体で知っているというか。

○米田 そうそうそう。

○河原 確かに、大きいのを描いている方がいるイメージがありますね、ココペリさんの。そういう経緯というか、経験があつてというので。

○米田 そうそう。やっぱり規格の八つ切りだったりとか、四つ切りだったりとか、A3の規格ばかり描いていたら、そこでいつの間にか精神的な額縁ができてしまうような気

がして。(笑)

○河原 ああ、精神的な額縁。(笑) なるほど。

○米田 そこを僕は、やっぱり自由にやってほしいというからには、紙も自由、画材も自由というような。小さい作品を描き続けたいっていうんだったら、そういう場を提供するというのを美術部からもう始めたので。だから、美術部をやるときも、いわゆる当時もう既に活躍していたいろんな福祉事業所が当時あったんですけど、そういうところを見学して、美術部に取り込んでいるんですよ。

○河原 おお、そうなんですね。

○米田 そうそうそう。ちょっと関東圏に出張があったときに、上司に掛け合って、無理言って、ちょっと回らせてくれと。

○河原 えー、すごい。どういうところを盗むというか、ピックアップしていくんですか、例えば。

○米田 どういう環境をつくっているのかとか、どういう関わりをしているのか、職員とそこの人たちが。学校へ見学に行ってもそういうのはないので。(笑) そういうことは多分期待できないと思ったので、福祉事業所ですよ。そういうところに行って、実際に障害を持っている人がどういう机で、どういう画材を使って、どう描いていたり、それに対して職員さんがどう関わって、どんな声掛けをしているのかなというのを実際に。

○河原 なるほど。リサーチを経て、こういう美術部での活動というのが。

○米田 そうそう。それはそのままココペリの活動にも生かされているんで。

○河原 結構全国の先進的な福祉事業所、福祉施設の活動とかお仕事の環境を見て、そのいいところが結構いろいろココペリには入っている。

○米田 そうですね。だから、そのとき、美術の授業をしながら、やっぱりもっと彼らが本当に描きたいとか、発想が出るまで待ってあげる時間があればいいのにと考えていたら、やっぱりそういうことを福祉事業所でやっていたりとか、待つということをやっていたりとか、「そういうのが、ああ、やっぱり大事なんだな。大切なんだな」ということを、そこで確かめられたといいますか、これをちゃんと大切にワークショップもやろうというような感じですね。

○河原 なるほど。その視点で福祉施設に来る人って何か少なそうというか。

○米田 (笑)

○河原 作品があつたり、人に会いに行くみたいな。結構、もう少し空間、環境、状況と

か、その人とその職員とか、そういう全体を見ているというか。それは、なかなかすごいな。でも、そういう課題感というか、問題意識が自分の中にあるからこそ、そこをピンポイントで気づけたというか。

○米田 そうですね。

○河原 何かそういう特殊性は、米田さんってありますよね。(笑)

○米田 特殊性。(笑)

○河原 ちょっと後半、展覧会の話もしていきたいんですけど、福祉施設で働いている方の作品であったり、個人で、ご自宅で作っている方の作品というのは、メインでギャラリーでも出展することが多いんですけども、このココペリって中間支援というふうに先ほどおっしゃっていたみたいに、何かどっちでもない場所であり、かつ米田さんという、作家をやりながら、支援学校での先生の経験もあって、中心的に、創作が多分すごく中心を占めている人が、いろいろな作り手の作品を見て管理していくみたいのところって、結構珍しいように僕は感じていて、そういうのもあって、今回ちょっとちゃんとお話も聞きたいなみたいなのところもありつつ、ちょっとその辺も。

○米田 福祉関連の方って、当時もあんまり関心がないというか、障害のある方が美術をやっても、やっぱり趣味だよなという、いい趣味できたねぐらいの感じで。やっぱりそこでいろんな展覧会に来てくれ来てくれって言っても、やっぱり見て、何かいい経験になったねといって終わっていくことがやっぱり多いといいますか、だから、そこじゃないんだよなということが結構。だから、福祉にアピールしていくんじゃなくて、これはやっぱり美術関係とか文化関係の人に伝えていって、そこが動いていくことで底上げするというか、むしろそういう福祉の人たちが関心を持ってくれるというような場をつくっていったほうが早道なんじゃないかなって途中で思ってますね、なので、自分が持っている美術関連のいろんなネットワークだったりとか、そういうものも存分に使わせてもらって。

当時、多分偶然なんですけれども、富山県が、いわゆる富山県展というのとはまた別の、もう1個新しい展覧会をつくったんですね。それは、県展とまた真逆にあるような出品条件ですよ、全く自由。受賞歴があってもいいし、大きさも無制限で。

○河原 あっ、すごい。珍しいですね。

○米田 材質も、危険とか腐ったりとかしなければいいみたいな。(笑)

○河原 なるほど。(笑) すごく門戸の広い。

○米田 そうですね。そういうのを仕方なくつくったみたいな、最初はね。いわゆる女性

美術展だったりとか、労働者美術展みたいなのがなくなって、その受皿をつくるためにつくったような感じのところなんだけど、でも、それをつくったことで、いわゆるガラスの現代アートだったりとか、今まで県展にあるジャンルに入らないような作品というのが出品できるようになって。

○河原 なるほど。

○米田 あとは、いわゆる障害のある方のクレヨンで描いた絵だったりとか、そういうようなものですね。何かよく分からない。(笑)

○河原 (笑)

○米田 訳の分からないものだったりとか、ルーチンで作り上げるものとか、そういうようなものも受け入れてもらえる展覧会が1個できたんですよ。

○河原 へー。

○米田 それで、これはよかったと思ってそこに出し始めたら、やっぱり毎年ココペリの人がみんな入選して、誰かが必ず受賞しているというような状況。審査員も、作家さんじゃなくて、どっちかというと学芸員だったりとか、新聞社の文化部だったりとか、デザイナーだったりとか、ちょっと毛色の違う審査員をあえてそういうチームにしてやっていたところもあって、やっぱり見たことないものに賞をくれるというのができて、そこができたことで、「何だ、この作品は」とか、後追いで、あの賞を取った作品は障害を持った人が描いたやつらしいよというような受け取り方とかというのができて、こういう作品の存在というのが県内に結構周知できる場ができたというか、その影響がすごく大きくて、やっぱり県内のいろんな、もう既にいろんな影響力を持っているような作家さんだったりとか、そういう人たちがココペリの展覧会に足を運んでくれるようになったりとか。

○河原 おお。

○米田 いわゆる作家が企画して行うような、県内の作家さんを50人ぐらい集めてビエンナーレ形式で展覧会をやりましょうかといったときに、もう最初の段階からそういう人たちの作品もアーティストとして呼びましょうというような雰囲気が出来上がっていたりとかして、いわゆる障害者として何かアピールするというようなことではなくて、いい作品はちゃんとフィーチャーしてもらえるというような、そういうものが自然と、そういう流れができていったと。

だから、そういうような活躍の場が1個保証されたというのもあって、ココペリはココペリで安心して作家さんたちの活動とか、そういうものをしっかりとつくっていくことが

できたというか、殊さら社会にアピールをむちゃくちゃしなくても、もう既に、自然にそっちで広がりつつあったというか。そこは、富山のまた1つ、ちょっとほかとは違う特殊性だと思うんですよ。

○河原 そうですね。そういった事例がほかの都道府県であるか、ちょっとぱっと出ないですけど。

○米田 多分、既にアーティストとして活躍している人とか、そういう突出した人がなくて、福祉法人の中でもアート活動で突出しているところではなくて、多分全体がゼロから始まっているんで。(笑)

○河原 ああ、芸術というか美術分野とかも。

○米田 そういう障害者アートというものに対しては全く情報がない中で始まっていて、今も公募展に出して、その作品のよさというところから入っていつているというのは、多分流れとしてはよかったんだと思うんですよ。

○河原 なるほど。

○米田 障害者枠があって受賞しているわけじゃないので。だから、そういう点では、もともと富山にあった近代美術館とかがつくってきた、いわゆる現代アートの流れであったりとか、多分そういうものもあると思うんですよ。そういう、いわゆる今まで見たことがない表現とか特異なものに対しても、やっぱり受け入れる土壤があるというか。それが発揮できる場所が、その公募展ができたことで保証されたといいますか。

○河原 外というか活動拠点とは別に、出していく場所がはっきりとコンスタントにあるっていうのは活動しやすい。

○米田 活動しやすいですね。しかも、そこが障害のあるなしにかかわらず出品できて、しかもフラットに、いい作品であれば賞をもらえるという。いわゆるよくあるのが、障害のある方の展覧会とかをずっと企画してきているんだけど、公募展もやるんだけど、障害のある人として集めた作品の中では、やっぱり賞をつくるのってすごく抵抗感があって、やっていないですね。

○河原 ああ、よく聞きますね。やっぱり、そこは福祉の部分として、1人にフィーチャーしづらいみたいなのを聞きますね。

○米田 だから、今言った障害のあるなしにかかわらずという中では、あっていいと思うんですよ。でも、何かそこを、障害のある中でそれをつくってしまうと、偏ってしまうのではないかという。(笑) その人の評価というものをうかつにやるんじゃなくて、一人

一人のよさというのを認めている、表現の独創性とか唯一無二性だったりとか、そういうものが一番評価の中心になっているはずなのに、順位をやっぱりつけるのはちょっと曲がっていくという感じがあって、なので、本当に多様な場所であれば、一般の人も混ざってというところであれば、そこはやってもいいと思っているんですよ。

○河原 なるほど。

○米田 だから、そういう場所で、本当の自分の立ち位置というか、作品の評価というのが表れる場所である、そこが1個あることで、そういう賞のない展覧会というのも安心してできるというか。

○河原 なるほど。やっぱり選択肢というか、いろいろあって、自分で選択していける安心感みたいなものもありそうですね。何もなくて、これだけとなってくると、そこに固執しちゃうというか。

○米田 障害を持っている方って、ほぼ今の日本だったら100%支援学校卒業生なので、やっぱり褒められ慣れているので。(笑)

○河原 ああ、なるほど。その授業なりで。

○米田 そうそうそう。インフレを起こしているんで。(笑)

○河原 (笑)

○米田 だから、美術の場でもそうなのではないかと思っているんですよ。

○河原 ああ、それはそうかもしれませんね、確かに。何に対して褒められているのかというのは、少し鈍りそうな環境なのかもしれないですね、下手したら。

○米田 そうそうそう。

○河原 でも、障害とかも関係なく、学校って結構そういう場所かもなって。ちょっと大きい話になっちゃうんですけど。(笑)

○米田 そうそう、そうです。

○河原 何かなかなか飛び出していたり、へこんでいたりするものがないようにしていく多分場所だと思うので。

○米田 さっき美術の授業の話もあったんですけど、学校の美術の授業って、基本的にはやっぱり工芸と一緒に、工程がはっきりしていて、みんなが同じ工程をたどって行って、最終的に個性が出ればいいというような。最初に個性があっちゃ駄目なんですよね、出だしで。(笑)

○河原 なるほど。

○米田 だから、そういう中での評価やから、あくまでも。でも、それと、いわゆる美術の中の、作品展の中の評価というのが一緒になってしまうと、あんまり面白くないというか。家族もそうなんですけどね。家族もやっぱり、それで「ああ、すごい、この子」というような変な受け取られ方をするのも何か申し訳ないし。

○河原 本当に何かそういう話をやっぱり含めて、美術というジャンルの中にしっかりとアール・ブリュットであったり、障害のある方が作る作品、行為とか、そういったものがしっかり入り込んでいくというか、既にもう入っているような感じもあるんですけど、そこでしっかりそこに関わる人たちが、例えば言葉にしていったり、昇華していったりっていう、そういう往復がどんどん繰り返されていくことで、より面白くなっていく分野なのかなと、何となく今感じますね、やっぱり。

○米田 関わっている、障害のある方の美術っていうのはそういう、今までの美術とかだと、知識がないと作品のことをしゃべっちゃいけないとか、何か怖い部分があったりとか。
(笑)

○河原 何かハードルが高いみたいな。

○米田 そうそうそう。逆に見えを張って「ピカソなんか俺でも描けるわ」みたいな、変なおじさんが言っていたりとか。(笑)

○河原 よくいるおじさんが。(笑)

○米田 そうそう。ああいうふうにゆがんでしまうんで。(笑) でも、アール・ブリュットというのは、そういう下地がなくても、作品に対して素直に物を言えるような。それって作品が持っている力だと思うんですけど、やっぱり生活からの地続きであったりとか、いわゆる知識とかテクニックとかというのを使っていない、本当の原初的な姿をそのまま見せてくれるから、こっちも武装しなくていいというか、鑑賞者も。

○河原 はい。

○米田 そういうよさがあるんで、だから、人と人とのつながりというのが本当につくりやすいですね。普通の美術ではちょっとあり得ないようないろんな人が関わって、助けてくれたりとか、あるいは作品展を一緒にして、「いや、何かこういうの初めてやったけど、面白いですね」というようなところにつながっていったりとかって、普通の美術のボランティアとかイベントでもあるっちゃありますけれども、やっぱりまたちょっと何か笑顔の質が違うというか。(笑)

○河原 そうですね。笑顔の質が違うというのは、すごく何かずしんとくるというか、そ

れは感じますよね。多分笑顔の質って、言い換えたなら共感の質というか、共感すると笑いが起こるのかなとも思うんですけども、共感のレベルが非常に深いなとは毎回思いますね。

○米田 本当にナチュラルに共感している感じが伝わってくる。

○河原 何か触れ合う感じが。

○米田 共感しにいこうと思って、置きに行っているわけじゃなくて。(笑)

○河原 そうなんですよ。しちゃっているというか。

—了—